

わたしの隣人とは誰ですか

(渋谷聖書集会) 田中 健三

私たちが生きていく上で、困った時に助けてくれる隣人がいるということは測り知れないほど決定的なことです。私たちの生存はそのような隣人によって支えられていると言っても過言ではありません。それは個人生活の領域だけに限ることではなく、共同体にも当てはまりません。だから社会政策や国際政治において、それが隣人関係を構築していくものなのか、あるいは壊していくものなのか、ということが重要な指標となるでしょう。そういう意味で戦争は、隣人関係を破壊する最たるものであり、今じわじわと進行している監視社会化も隣人関係を壊していくとしたらそれは自分で自分の首を絞めることになりかねません。さらに加えるならば、隣人関係構築にはその人の自立あるいは自主性というものが前提となります。他人が仲良くするから私も仲良くするというのではなく、他人がどうであろうと私はこの人の隣人になる、という態度が本当の隣人関係を築くことになるからです。

こうして見ると、福音書において、最も重要な掟とし

て、「神を愛すること」と並んで「あなたの隣人を愛すること」が記されていることが如何に実践的な教えであるかがわかります。この教えは現実の人生行路と密接に結び付いたものと言えましょう。

本日はルカ福音書十章二五節から三七節を読んでみようと思います。以下新共同訳で記します。

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、

「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取

り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払いませ。』36さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。37律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

この後半部分は「善いサマリア人の譬え」として有名で、ゴッホやルオーなど多くの著名な画家も絵の題材としている箇所です。「隣人とは誰か」ということを定めてからその人を助けるのではなく、偶然とも言える出会

いと実際の行動によって初めて「隣人になる」のだ、という含蓄に富んだ譬えであり、これはキリスト教か否かに関わらず通用する教えです。

ところで前半部分の「二つの愛の掟」はマルコ福音書とマタイ福音書に並行記事があるのですが、それらと比べてみるとルカの特徴がよくわかります。ルカは二五節の「律法の専門家」がイエスを試そうとしたり、自分自身を正しい者として考えていたり（二一九節）、イエスとの距離があることが示唆されていますが、マルコではイエスに質問した「律法学者」に対してイエスは「あなたは神の国から遠くない」（マルコ十二一四）とむしろ評価しています。ルカは後半部分で祭司やレビ人を律法を実行しない人として描いていることも踏まえ、ルカはユダヤ教全体に対してある種の判定を下しているとも言ってもよいと思います。マルコでは律法学者の中にも、神の国に近い者がいることをあえて記されているのと対照的に、ルカは、異邦人伝道というルカ福音書執筆の背景の中で、ユダヤ教との関係をマクロに見ており、ユダヤ教の指導者層は実質的に律法を実行しておらず、異邦人は逆に律法を実質的に実行する

ことによつて、永遠の命を継ぐことができる、という考えを持っていたものと思われまゝ。

ここにルカの意図を見てみましたが、本日はそのようなマクロ的な視点ではなく、マルコのように具体的な一人一人という視点に固着してみたいと思います。ルカは思想にはそれとしての意義はあるのですが、「隣人になる」ということは本来はその人の背景（日本人であるとかどこの出身だとか云々）などのマクロ的問題ではなく、その人自身と自分の個別の具体的関係性が重要だからです。

そうすると後半部分にまた戻りますが、「隣人を助ける」つまり「隣人だから助ける」のではなく、「隣人になる」と言い換えれば「自分の隣人でなかった者を助ける」という物語と言えます。ところでサマリア人にとつてユダヤ人は敵対関係にあったことに注目しなくてはなりません。歴史的にサマリア人はユダヤ人から軽蔑、嫌悪されていた存在でした。この譬えで半殺しに会った人はユダヤ人とは明言されていませんが、おそらく状況からしたらユダヤ人でしょう。隣人でない者、場合によっては自分の敵を助けるということは、単なる同情だけでは

できることではありません。相手の人の中に、何か「尊いもの」を見出してこそできることです。

ここでこの譬えを少し離れますが、私たちは自分の敵の中に何か尊いものを見出すことができるでしょうか。敵の言い分の中に、場合によっては自分に対する罵倒の中に、何か宝が隠されていないか、という姿勢をとることができでしょうか。これは甚だ難しいことであり、特に私にとっては困難なことです。しかし「隣人になる」とは究極的にはそういうことであり、「隣人を愛する」とはそういうことなのだと思います。イエスの言う「敵を愛せ」（マタイ六²⁷他）と「隣人を愛せ」は密接に結び付いているのです。敵の中に尊いものが何かないか見出さない限り、敵は死ぬまで敵であり、自分の隣人にはなりません。相手にとつても自分とはずつと平行線のままで交わりません。しかし相手に何か尊いものがあるれば、それによつて自分と相手との接点ができるのではないのでしょうか。具体的に言えば、（これは一つの可能性の話ですが）わたしの周囲では反安倍政権一色で、わたし自身も安倍首相やその仲間の政策に強い違和感を覚えるのですが、彼らの中に敵を見出すだけであれば、ずつと平行線のままです。彼らの中にもし尊いものがある

たとしたら、それは率直に認めなくてはなりません。公的な政策はまだしも、個々の人間関係において敵の中に何か尊いものを見出すことは、人間存在そのものにおいて根本的な事柄と関係してくるような気がします。

とは言え、これはとても難しい注文です。私は特に敵と味方を固定化してしまう傾向があり、最も苦手なことも見出されません。しかしイエスは正に、敵の中に尊いものを見出した方でした。イエスの言動を理解しない人々の隣人になろうと最後までした人でした。私たちも本質的にイエスに反感を抱く存在です。もし今ここにイエスが居たら私たちは無条件に跪くでしょうか。私はイエスがいたら反感を抱き、憎しみさえ抱くかもしれない、と思っています。しかしイエスは私たちの隣人になろうとしてくれた。敵である私たちの中に尊いものを見出していてくれる方なのだと思います。

そのようなイエスがいるからこそ、私たちにも「隣人を愛せ」という掟が可能となります。「善いサマリア人の譬え」のあとにルカは「マリアとマルタの物語」を続けたのは絶妙な配慮です。「善いサマリア人の譬え」では「行動せよ」という指針が示され、「マリアとマルタの物語」では「行動するよりもイエスに聞け」という指

針が述べられています。私たちには「行動せよ」と「イエスに聞け」の両者は不離一体の教えです。

よく礼拝の聖書講話で「世の中は〇〇ですが、わたしたちクリスチャンは△△です」という二項対立で話す人がいますが、私はそれに違和感を覚えることが多いです。もちろんそういう面はあるでしょうが、私たち自身が「世」でもあり、神と対立する存在であることが抜け落ちていては駄目だと思います。

私たちは本来隣人がいない、また隣人を愛せない存在です。そして私たちは本来神と敵対するような存在です。そうであるが故にイエスが私たちの隣人であろうと続けていることを肝に銘じなくてはなりません。それに固着することによって初めて、私たちの隣人を愛することができのだと思います。

それらのことを記した聖書箇所を最後に記します。

敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。

つまり、神はキリストによつて世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

第二コリント書五 19

(二〇一七年七月九日 浜松聖書集会にて)